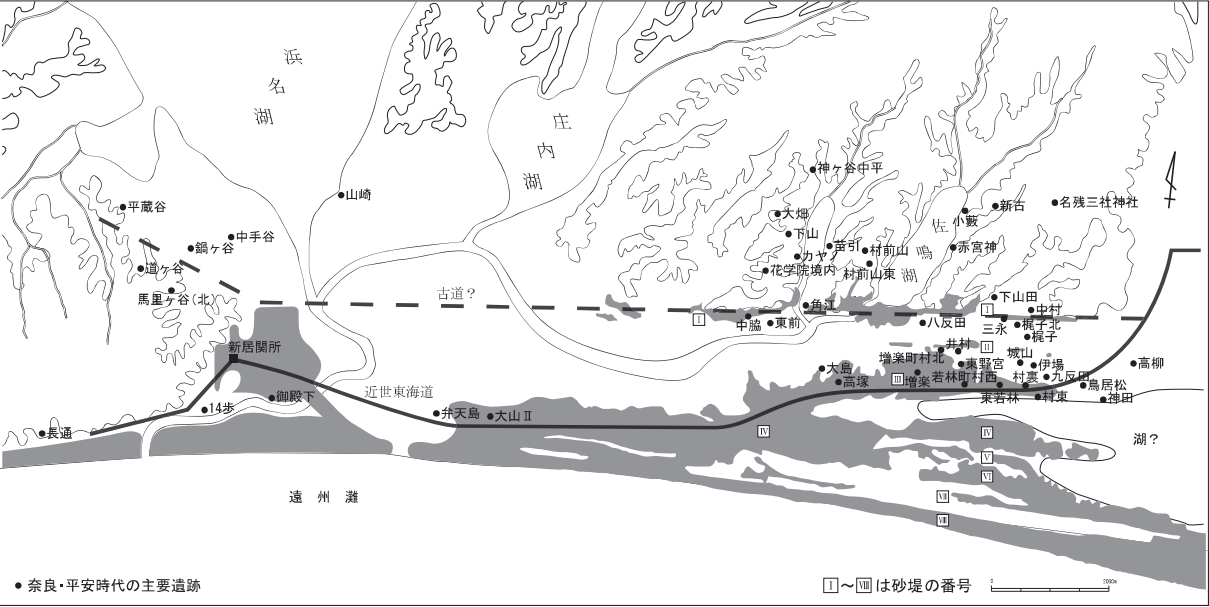


さな湖にすぎなかった。その平野の中を浜名川が蛇行して南流していたと考えられている。

1つの疑問点 奈良・平安時代における古代東海道の道筋は、近世東海道とほぼ同じルートと想定されている。すなわち鳥居松遺跡付近から第3砂堤上を西進し、高塚遺跡を通過するとやや海岸方向にカーブして現在の舞阪港付近に至るルートである。しかしこのルートには、1つの疑問点がある。それは“なぜ”ルートを南へ曲げたのかという点である（第23図参照）。当時、浜名湖の南岸一帯は陸地化していたはずであり、敷智郡衙であった伊場遺跡群から浜名郡衙が想定される鷺津付近まで、ほぼ直線ルートで行けたのである。曲げる必要は何もなかった。古代の官道は直線ルートを基本に設計されていたのではなかったのか。そこで考えられるのが、15世紀末に浜名湖の南岸一帯が地盤沈下したとき、古代東海道の一部が浜名湖および庄内湾の湖底に沈んだために、近世東海道ではルートを南へ曲げざるを得なかったという仮説である。

一直線の大溝 最近、興味深い遺構が中村遺跡で発見された。中村遺跡の発掘調査は雄踏街道の拡幅に伴うものであったため、調査区は幅6～10 m、東西方向へ全長約700 mの細長い形状をしていた。その細長い調査区の中で東西方向へ続く推定650 mの人工的な溝を検出した。上幅が約4 m、下幅が1.5～2 mの規模をもち、壁面の崩壊を防ぐために、杭を打ち粘土を貼り付けて養生してあった。溝の下層から7～8世紀の須恵器、土師器、土製品、木製品、木簡などが多数出土し、上層から10世紀の灰釉陶器が出土した。検出した溝は1条であったが、調査区の外にもう1条ある可能性がある。この溝は大規模な区画溝もしくは道路の側溝である可能性が指摘されている。静岡市曲金北遺跡で発見された古代東海道の側溝は幅4～5 mであり、中村遺跡の大溝とほぼ同じである。遺物の出土状況も類似している。

第1砂堤上の道 この中村遺跡の大溝は道路の側溝と確認されたわけではない。しかし第1砂堤上に古代東海道を想定できる好条件が揃っている。以下のようなものである。①地盤が安定してい



第23図 古代東海道想定図

る。台地に接しかつ最初に形成された砂堤であるため、基盤が安定している。また第3砂堤に次いで距離が長く、真っ直ぐに東西方向に伸びている。②主要な雄踏街道が第1砂堤上を通っていた。バイパス道路ができる以前は、第1砂堤上の雄踏街道がこの地域における重要な東西交通路であった。③第1砂堤およびその両側には、各時代の主要な遺跡が連なっている。縄文時代は多量の遺物が出土した中村遺跡、梶子北遺跡、角江遺跡があり、弥生時代は中核的な集落が想定される梶子遺跡、伊場遺跡、角江遺跡、東前遺跡がある。古墳時代は大集落遺跡である大平遺跡、中平遺跡、坊ヶ跡遺跡があり、古代は木簡が出土している伊場遺跡、梶子北遺跡、東前遺跡がある。

第2節 砂堤上の縄文集落

海岸平野の縄文遺跡 近年の発掘調査によって、浜松市南部海岸平野には多くの縄文時代の集落が分布していることが分かってきた。第1砂堤上には、町田遺跡、中村遺跡、梶子北遺跡（北半）が立地し、町田遺跡で後期後半の土器が出土、中村遺跡と梶子北遺跡で多数の石器類と共に前期末～中期初頭の土器が出土した。第1・2砂堤列間湿地には、梶子北遺跡（南半）、梶子遺跡（9次）、同（10次B）、角江遺跡、東前遺跡があり、梶子遺跡（10次B）で後期の土器が出土、角江遺跡と東前遺跡で後期後半～晩期の土器他が出土した。第2砂堤には、伊場遺跡、城山遺跡（7次）があり、伊場遺跡で石器類が出土、城山遺跡（7次）で前期末～中期前半の土器が出土した。第3砂堤には、村西遺跡、東野宮遺跡、高塚遺跡があり、村西遺跡で石斧と石錘および前期末～中期初頭の土器が出土、東野宮遺跡で石錘と凹石が出土した。そして高塚遺跡2次で中期前半の土器が3個体出土した。



第24図 砂堤列分布図

番号	遺跡名	場 所	標高(m)	時 期	出土遺物
1	ゼゼラ	浜名湖湖底	－1.5	中初、後前～晩前・後	石斧、石錘、土器
2	スモテ	浜名湖湖底	－1.5	中初、後後、晩前・後	骨鉋先、石錘、土器
3	渚園	浜名湖湖底	不明	中期	土器
4	村櫛海水浴場沖	浜名湖湖底	－1.5	中初、後後、晩後	土器
5	村櫛海岸	浜名湖湖底	約－1	後前	土器
6	新居弁天沖	浜名湖湖底	約－1.5	中初～中中、後後～晩末	土器
7	町田	第一砂堤	－1.5	後後	土器
8	中村(南伊場)	第一砂堤	±0	前前～中前、後前	土器、石鏃、石錐、石錘、石匕、磨石
9	梶子北(北半)	第一砂堤	±0	前前～中初、晩前	礫群、石錘、石鏃、石匙、石皿、土器
10	梶子北(南半)	第一・二砂堤列間湿地	－0.5	後前～中、晩末	土器
11	梶子9次	第一・二砂堤列間湿地	－1.8	中初	土器
12	梶子10次B	第一・二砂堤列間湿地(流路)	－0.9	晩前	土器
13	角江	第一・二砂堤列間湿地	－1.5	後後、晩前、晩後	土器
14	東前	第一・二砂堤列間湿地	－1.2	後後、晩末	土器
15	伊場	第二砂堤	+1.5	晩後	石斧、石鏃、石錘
16	城山7次	第二砂堤	+2	前末、中前	土器、石鏃、石錘
17	村西	第三砂堤	+1	前末～中初、後前、後後	石斧、石錘、土器
18	東野宮	第三砂堤	+2	不明	石錘、凹石
19	高塚	第三砂堤	+1.7	中期	土器

表7 南部平野の縄文遺跡

砂堤列への進出 従来、南部海岸平野は縄文時代中期までは海面下に沈んでおり、後期～晩期の海退に伴い陸地化したと考えられてきた。当然、各砂堤列も海面下であった。しかし最近の一連の調査により、それは間違いであることが分かってきた。

縄文時代前期前半の土器が、第1砂堤上の中村遺跡と梶子北遺跡（北半）から出土し、前期末の土器が第2砂堤上の城山遺跡7次と第3砂堤上の村西遺跡から出土していることから、縄文時代前期末の時点で少なくとも第3砂堤までが陸地化していたはずである。また第1・2砂堤列間湿地の梶子遺跡（9次）で中期初頭の土器が出土していることから、砂堤列間湿地のような低地においても中期初頭までには陸地化したとみられる。以上のように、従来考えられていたより早い時期から大規模に陸地化し、生活拠点となっていたと推定される。

共通のある問題点 問題は遺構面の標高値である。第3砂堤上の高塚遺跡で標高1.7 m、東野宮遺跡で2 m、村西遺跡で1 mであり、第2砂堤上の城山遺跡（7次）で2 m、伊場遺跡で1.5 mである。これらの数値は一見したところ何の問題もないようであるが、実は大きな問題点が隠れている。それは溝や川の底面が標高0 mより低くなり水が流れないのである。次に、第1砂堤上の長田遺跡で標高－1.5 m、中村遺跡（南伊場）で0 m、梶子北遺跡（北半）で0 mであり、第1・2砂堤列間湿地の梶子北遺跡（南半）で標高－0.5 m、梶子遺跡（9次）で－0.8 m、梶子遺跡（10次B）で－0.9 m、角江遺跡で－1.5 m、東前遺跡で－1.2 mであり、浜名湖湖底遺跡の標高値は推定－1 m～－1.5 mであり、実際に水面（海面）下にある。このようにすべての遺跡の遺構面は現在の海水面より低い位置にある。これでは生活することもできず、竪穴住居も建てられない。またこれより約2 m下にある溝と川は絶対に流れない。これらは明らかに地表面が相対的に下降していることを示している。

地表面の下降 地表面の相対的な下降を考える時には、①地震等による地盤沈下、②沖積平野の